



前原花秋 推選
やや墨量少ないが、太細、縦長、幅広、リズムが素晴らしいです。「く」「一」の開閉を効かせた見事な渴筆が眼を惹く。最優秀の皆落款配置大きき見事です。

坂本千陽 推選
少し頑張りすぎたかな？上半身抑えたかった。が相変わらず動きリズム良く心地良いです。「湖」の墨が効いています。墨色中途半端です。ご一考下さい。

山口千睡花 推選
リズムいいですね！リズムがいいから広がり、明るさ、線の種類の多さが見事に表現されています。最近の目まぐるしい進歩、工夫に目を見張るものがあります。

三宅春華 推選
「老」大きすぎましたね。「珠のごとく」渴筆、点の位置広がり素晴らしいです。「湖」の点の大きさ、位置一考ですね。「一」は「一」とせず、「シ」とのバランスですね。

武良霜伯先生選評



出戸端 瞭 吾 推選
帝王太宗皇帝のスケールの大きさを考えると、一行目七字で大らかに書作している貴兄の作は、膨よかで温かい線等々その雰囲気がよく表現されている快作です。

今村 燦 崇 推選
王羲之を思わせる緩急抑揚のある筆遣いで、一字目から二行目最後まで筆意良く流れている。紙面の納め方纏まりも抜群で、落款まで通貫して清々しい作。

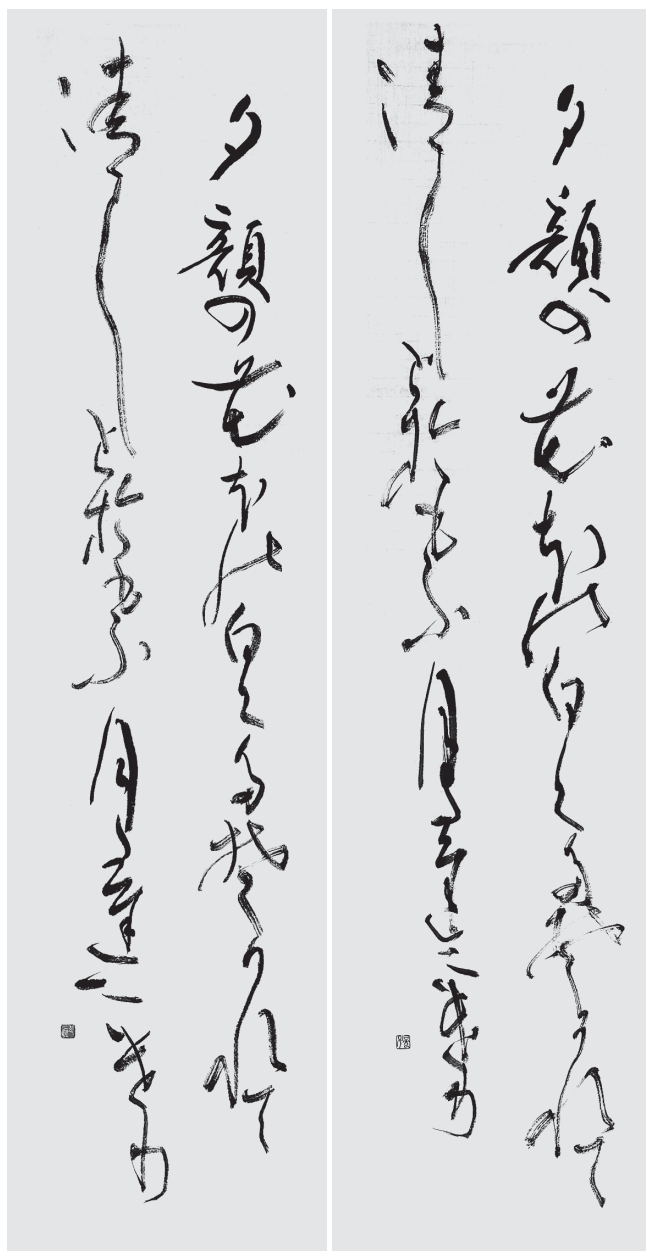
大橋 春光 推選
一、二行とも大きな腕の動き、潤った厚みのある大らかな線が魅力的。「資、懿、輔、錫、社、寔」の懐の広い縦長の文字造形が良く、目にとまりました。

堀 桂 晶 推選
一字一字の結体に安定感があり、羊毫に墨量載せてどっしりと書かれている。一点一画にしっかり足を踏まえ、筆力が紙背によく通っている。最優秀作に相応しい。

露崎桂子先生選評



笠原博子先生選評



寺田翠鷗 八段
原帖をきちんと捉え、理解して書かれています。臨書の確実な学びの成果でしょう。二つの行間にもう少し変化が出ると更に上の作になります。

野々村春霞 七段
伸びやかな線条で原帖の和歌を口ずさみながら書かれたような、自在な印象のある作と感じました。作者の書く楽しさが伝わります。

藤井実山 六段
温かさのある線条でゆったりと書かれ、ほつとするような作です。原帖のもつ勢いの良い払いやハネがもう少しあると更に引き締まった作。

高橋紫風 師範
リズムに任せて一気に書かれている筆勢をよく捉えていて、特に四行目は見事です。渴筆部分も筆が良く動き、原帖の特徴が良く出ています。

田中桂子 師範
墨色の変化が実に自然で印象的な作です。無駄な力が入らず、最後まで自分のリズムで書かれていて、心地良さを感じる作となりました。

栗村雪音 準師
原帖の字間の変化を良く捉えて、纏められました。行間の変化も良いバランスですが、最後の行にやや強さが出ると更に良い作になります。

半田都志 推選
しなやかに筆が良く動いています。左行の「し」から「ふ」までの抑揚のつけた息の長い渴筆線に魅了されました。温かさを感じる作品です。

松下晃子 推選
転折では一旦筆を止め、しっかりと紙に食い込み、又穂先がよくきいた筆線は最後まで気を配り、作品全体が引き締まっています。墨の推移も自然で美しいですね。

加藤有鄰先生選評



実川蒼波 師範
筆先が紙面にどっしりと食い込んでおり、線質が素晴らしい。安定感のある運筆と形体が快作を呼び込みました。

桜井信吉 八段
横画の起筆の角度が安定しており、良く隸書の筆法を心得ています。ゆつくりと運筆され重厚さを増した表現もよろしい。

英敏 師範
重厚で渋みある線を用いての表現は原帖をよく理解しており、傑作である。随所に見られる渴筆も温かく柔らかで質が高い。

関恵美 準五
確実に丁寧なリズムミカルに運筆されています。形体も安定しており、適度な緊張感が作品全体を引き締めています。

関矢朱鷺 師範
姿勢良く大きな構えて落筆高く、リズムミカルに大らかに運筆されています。横画における手首の返しも程よい。

大前さやか 準六
起筆から運筆への筆の返しが自然で柔らかく巧みである。隸書を良くマスターされている。形体も安定しており充実した臨書作である。

大橋美灯 師範
争坐位稿の特徴である軽重、強弱を巧みに使い分けて表現されている臨書作品です。また運筆に無理が無く、流暢である。

清野友泉 四段
柔らかな筆の握りを用い、構え大きく確りと紙面を捉えて顔真卿の豊かな流麗さを見事に表現されています。落款弱いです。

片岡美恵子 準師
導かれる線の大胆さと明るさをもって、深く豊かな線質を醸し、作品を表現しております。この運筆力はあなただけの宝物です。

石川詩織 準二
運腕が大きく、流麗で形体が美しい。伸びやかで温かな筆致を用いての運筆のリズムが宜しく、温雅とした表現をしています。

井波水希 準八
高い落筆からの運筆が見事な作品です。全体に、温かで深みある線質で表現しており、原帖をよく醸し出しています。

竹谷嘉乃 準初
この段階での作品とは思えぬ、筆先の扱いが見事で重厚さと大胆さ、伸びやかさが心地良く表現されており、安定しています。